

2004年度

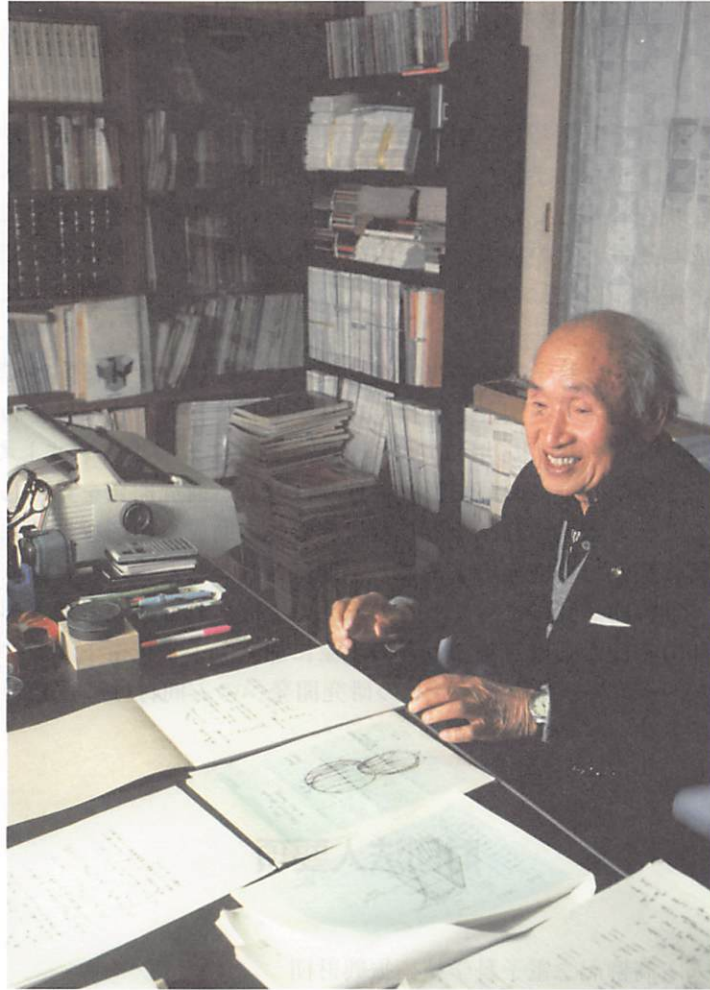
**高柳記念賞及び研究助成
科学放送賞**

贈呈式

期日：2005年1月20日(木)17：10より

場所：アルカディア市ヶ谷(私学会館)

財団法人 高柳記念電子科学技術振興財団



“テレビジョンの父” 高柳健次郎の功績

明治32年1月20日、静岡県浜松市生まれ、東京高等工業学校を卒業後、大正13年、浜松高等工業学校助教授となり、テレビジョン研究を本格的に開始しました。昭和元年世界で初めてブラウン管式受像装置で片仮名の「イ」の字の受像に成功。その後昭和5年には、昭和天皇にテレビジョンの実験を天覧に供し、これが契機となり、文部省・日本放送協会などから研究費の援助を得て、プロジェクトチームによるテレビジョンシステムの研究が可能となり、昭和10年に送受像を含めた全電子式テレビジョンを完成しました。昭和12年に日本放送協会に移りテレビジョン実用化の研究を続け、昭和14年にはテレビジョン実験放送を開始いたしました。その後、戦争のため実験放送が中止され、一時海軍技師を兼務しました。戦後は日本ビクター株式会社において研究開発の最高責任者として数々の独創技術を結実させる傍ら、後継者の育成・指導に当たり、また多くの公的要職も務めました。その間テレビジョンの普及に努めると共に、昭和34年には、現代の家庭用ビデオテープレコーダーの基本原理を発明する等、数々の研究開発を通じて今日の映像文化の発展に多大の貢献をいたしました。これらの功績により、昭和56年 文化勲章、平成元年勲一等瑞宝章を受章いたしました。その間、浜松名誉市民、静岡大学名誉博士（第1号）、SMPTE名誉会員（わが国最初）など多くの栄誉をうけました。以上数々の功績を残しましたが、平成2年7月 享年91歳をもってこの世を去りました。

財団設立の目的と活動

当財団は高柳先生の私財を基金として昭和59年10月に設立され、また同年12月に科学技術庁により試験研究法人の許可も下付されました。かつて高柳先生は、現在のテレビジョンの原理を最初に発明したのをはじめ、現在普及しているVTRの基本原理の発明など電子工学における独創的かつ画期的な技術開発を成し遂げ、その成果はわが国のみならず世界の各国において高く評価されています。これらが今や、産業、文化、教育など広汎な分野において活発に利用されていることはご存知のとおりであります。

先生はかねてから、わが国の科学技術の振興を念願され、特に21世紀に向けてわが国の産業が長期的に発展し、且つ科学技術の先進国として世界をリードして行くためには、わが国独自の技術を開発し、これを広い分野に多角的に応用してゆく必要を痛感されておられました。そのためには、産業の基礎である電子工学の分野において幅広い獨創性のある研究開発を見出し、これを育成させることが極めて重要なことと考えられ、そうした研究者への助成や顕彰を目的に財団を設立し、わが国の科学技術の振興に些かでも寄与出来ることを期待されました。この目的にそって当財団は研究者に対する助成や、獨創的研究によって多くの成果を上げられた研究者の表彰などを行ってまいりました。更に昭和61年度からは毎年これらの事業に加えて未来技術予測シンポジウムを、平成8年からは未来科学フォーラムを開催し、今後の研究開発への方向付けに役立つように進めてゆくことになりました。

財団法人要項

名 称	財団法人 高柳記念電子科学技術振興財団
主務官庁	文部科学省
設立許可	本財団は昭和59年10月31日内閣総理大臣・国務大臣科学技術庁長官により、民法第34条の規定に基づく公益法人として認可を受く。引き続き、昭和59年12月25日内閣総理大臣より試験研究法人の認可を受く。
目 的	本財団は電子科学技術に関する獨創的研究開発に対し助成を行い、また優れた研究業績者を顕彰することにより、わが国の科学技術の振興に寄与し、豊かな社会社会の創造に貢献することを目的とする。
事業内容	本財団は、その目的を達成するため次の事業を行う。 <ul style="list-style-type: none">●電子科学技術及びその応用に関する研究への助成●優れた研究業績のあった研究者に対する高柳記念賞などの顕彰●テレビジョン工学に関する研究開発の歴史に係わる資料の保存・展示及び活用●未来技術フォーラムの開催●優れた科学放送番組の顕彰
事 務 局	〒102-0082 東京都千代田区一番町4-5 ニューライフ一番町309号 TEL.03-3239-1207 FAX.03-3262-3028 E-mail tkinez@oak.ocn.ne.jp HP http://www.koueki.jp/disclosure/ta/takayanagi/
助成及び顕彰事業の執行	専門知識を有する方を委嘱して選考委員会を設置し、その審査決定に基づき事業を行う。

2004年度 高柳記念賞及び研究助成

財団法人 高柳記念電子科学技術振興財団（理事長 高柳 俊）は、末松委員長の主催による選考委員会を開催し、慎重審査の結果下表のとおり高柳記念賞1件 高柳記念奨励賞1件 及び研究助成2件を決定しました。

記

	対象者	研究業績及び研究テーマ
高柳記念賞 (副賞100万円)	安田靖彦氏 (早稲田大学 理工学部 教授)	情報通信における網構成とメディア信号処理に関する研究
高柳記念奨励賞 (副賞50万円)	小池康博氏 (慶應義塾大学 理工学部教授)	超高速プラスチック光ファイバーの開発と実用化の業績
研究助成 (助成金各200万円)	棟安実治氏 (関西大学 工学部 助教授)	知的信号処理手法の画像用雑音除去フィルターへの応用
	鵜殿治彦氏 (茨城大学 工学部 助教授)	波長1.5 μ m帯で発光するSi系発光ダイオードに関する研究

本財団の顕彰及び研究助成についての選考委員は下記の通りです。(敬称略、順不同)

委員長 末松安晴 (国立情報学研究所 所長)
 委員 相磯秀夫 (東京工科大学 学長)
 羽鳥光俊 (中央大学 理工学部 教授)
 三宅誠 (日本放送協会 理事)
 宮部博央 (日本電信電話株式会社 理事)

高柳記念賞



やすだ やすひこ
安田 靖彦 氏

情報通信における 網構成とメディア信号処理に関する研究

デジタル通信方式に関し、安田靖彦先生は大学院時代、「デルタ・シグマ変調方式」を創案されました。この方式はLSIとの親和性が高く、現在高精度のA-D変換方式の主流としてオーディオ分野をはじめ、様々な分野で広く使用されるとともに、世界的にいまなお活発な研究開発の対象となっております。また、昭和43年には群帯域を用いる新聞紙面電送用高速ファクスの帯域圧縮伝送方式として、信号スペクトルを圧縮する「3値アナログVSB方式」を開発されました。新聞社において広く実用されたこの方式は、その後国際標準化されたG2機の伝送方式を先取りする業績であります。さらに、昭和40年代の末頃からスペクトル拡散通信や無線パケット通信に関する先駆的な研究を行われました。

次に、画像符号化の分野において、ファクス信号の圧縮符号化や中間調画像のディザ表示に関する研究を精力的に行い、斯界の先導役を務められました。また、昭和53年に画像の段階的な伝送・表示・蓄積を可能とする「段階的画像符号化」方式を世界に先駆けて提案されました。この方式の概念は、現在スケーラブル符号化ともいわれ、静止画や動画の国際標準に採り入れられているとともに、デジタル放送における階層伝送やインターネットにおける映像配信方式にも広く実用化されております。さらに平成3年には、画像符号化におけるサブバンド符号化など様々な信号変換手法を圧縮効率の観点から統合する理論体型を提案され、静止画像符号化方式の国際標準JPEG-2000に大きな影響を及ぼしております。

情報ネットワークの分野では、昭和56年にCSMA/CD LANの研究活動を行い、メッセージごとに異なる優先権を付与できる「プライオリティ・イーサネット」を開発されました。また、安田靖彦先生は広帯域ISDN網の構成に関し、波長多重光ファイバー通信に適した分散交換を特徴とする超大容量のシャッフル・リングネットワークを提案されました。近年にはインターネットの各種資源の有効利用を図ると同時に、検索レスポンスの向上を図るグレースフルキャッシングシステムを提案し、研究開発を進められております。

この間、郵政省電気通信技術審議会の自動車・携帯電話システム委員会委員長として、わが国の第二世代デジタル携帯電話方式の規格取り纏め等をを行った。さらに、デジタル放送システム委員会委員長として、CS、BS、CATV、衛星音楽、地上波等わが国デジタル放送システムのほとんどすべての規格策定の取り纏めに尽力した。

- 経歴 1935年7月7日生
- 学歴 1963年3月 東京大学大学院数物系研究科電子工学専攻博士課程
- 職歴 1977年4月 東京大学生産技術研究所教授
1992年9月 早稲田大学理工学部電気通信学科教授
- 現在 早稲田大学理工学術院コンピュータ・ネットワーク工学科教授
IT研究機構長
- 主な受賞歴 1965年 テレビジョン学会丹羽高柳賞
1987年 電子情報通信学会業績賞
1987年 同小林記念特別賞
1996年 電波の日郵政大臣個人表彰
2000年 情報通信月間郵政大臣個人表彰
2001年 電子情報通信学会功績賞



やすだ やすひこ

安田 靖彦 氏

第20回 2004年度 高柳記念賞

「情報通信における
網構成とメディア信号処理に関する研究」

デジタル通信方式に関し、安田靖彦先生は大学院時代、「デルタ・シグマ変調方式」を創案されました。この方式はLSIとの親和性が高く、現在高精度のA-D変換方式の主流としてオーディオ分野をはじめ、様々な分野で広く使用されるとともに、世界的にいまなお活発な研究開発の対象となっております。また、昭和43年には群帯域を用いる新聞紙面電送用高速ファクスの帯域圧縮伝送方式として、信号スペクトルを圧縮する「3値アナログVSB方式」を開発されました。新聞社において広く実用されたこの方式は、その後国際標準化されたG2機の伝送方式を先取りする業績であります。さらに、昭和40年代の末頃からスペクトル拡散通信や無線パケット通信に関する先駆的な研究を行われました。

次に、画像符号化の分野において、ファクス信号の圧縮符号化や中間調画像のディザ表示に関する研究を精力的に行い、斯界の先導役を務められました。また、昭和53年に画像の段階的な伝送・表示・蓄積を可能とする「段階的画像符号化」方式を世界に先駆けて提案されました。この方式の概念は、現在スケーラブル符号化ともいわれ、静止画や動画の国際標準に採り入れられているとともに、デジタル放送における階層伝送やインターネットにおける映像配信方式にも広く実用化されております。さらに平成3年には、画像符号化におけるサブバンド符号化など様々な信号変換手法を圧縮効率の観点から統合する理論体型を提案され、静止画像符号化方式の国際標準JPEG-2000に大きな影響を及ぼしております。

情報ネットワークの分野では、昭和56年にCSMA/CD LANの研究活動を行い、メッセージごとに異なる優先権を付与できる「プライオリティ・イーサネット」を開発されました。また、安田先生は広帯域ISDN網の構成に関し、波長多重光ファイバー通信に適した分散交換を特徴とする超大容量のシャッフル・リングネットワークを提案されました。近年にはインターネットの各種資源の有効利用を図ると同時に、検索レスポンスの向上を図るグレースフルキャッシングシステムを提案し、研究開発を進められております。

この間、郵政省電気通信技術審議会の自動車・携帯電話システム委員会委員長として、わが国の第二世代デジタル携帯電話方式の規格取り纏め等を行った。さらに、デジタル放送システム委員会委員長として、CS、BS、CATV、衛星音楽、地上波等わが国デジタル放送システムのほとんどすべての規格策定の取り纏めに尽力されました。

経 歴 1935年7月7日生

学 歴 1963年3月 東京大学 大学院 数物系研究科電子工学専攻博士課程

職 歴 1977年4月 東京大学 生産技術研究所教授

1992年9月 早稲田大学 理工学部電気通信学科教授

現在 早稲田大学 理工学術院コンピュータ・ネットワークエ学科教授
IT 研究機構長

受領歴 1965年 テレビジョン学会 丹羽高柳賞

1987年 電子情報通信学会 業績賞

1987年 同 小林記念特別賞

1996年 電波の日 郵政大臣 個人表彰

2000年 情報通信月間 郵政大臣 個人表彰

2001年 電子情報通信学会 功績賞

高柳記念奨励賞

こいけ やすひろ
小池 康博 氏

超高速プラスチック光ファイバーの開発と実用化の業績

ここ数年来のIT分野の進展及び一般社会への普及は非常に目覚ましいものである。ブロードバンド時代といわれる昨今、人々のソフトやコンテンツへの期待は膨らみつつ、留まる場所を知らない。一方、家庭やオフィス内におけるハードのブロードバンド化はまだ十分浸透しておらず、両者の間のギャップが大きく現実化してきている。このような状況を大きくブレイクスルーし、真のブロードバンド社会をもたらす革新的技術である超高速プラスチック光ファイバー（POF）の発明者として、慶應義塾大学教授小池康博氏に大きな注目が寄せられている。

先生は、一貫して高分子物質における光機能の基礎原理とその応用に関する研究を行い、この間のギャップを大幅に縮め得る技術を発明し、さらにその技術を実用化し、社会への普及を目指したプロジェクトを推進している。

特に、先生が初めてその試作に成功したGI型（Graded-Index）POFは、リアルタイムコミュニケーションに必要とされるギガオーダーの伝送速度を実現しており、POFが高速通信に使用可能であることを実証した世界初の報告となった。このGI型POFの発明は長年の懸案であった加入者系の高速光通信の問題を解決する対策の有力な候補として、世界的に大きな話題を呼んでいる。GI型POFは、2000年6月旭硝子株式会社により製品化され、また、富士写真フィルム株式会社からも製品化されることが2002年9月に報道されている。

現在、慶應大学のキャンパス内には世界に先駆けたGI型POFによる高速キャンパスLANが構築されており、ギガビットのブロードバンドネットワークが実現している。2002年度には、大学と都内のマンションや、小学校等を結び、大学内の動画コンテンツの閲覧、遠隔授業等の実証実験が行われた。昨年12月開設された榊原記念病院にも、同POFが全館に敷設された。これにより、病院内情報すべてがベッド脇に設置された端末から情報端末に手軽に呼び出せるようになっている。また、2004年4月には東京・府中市内のマンションと病院を、GI型POFで結び、ネット健康相談の実証実験を成功させ、今後の遠隔医療等への応用にも大きな期待が寄せられている。

先生の発明は、ギガビットの光ファイバー・ネットワークを各家庭にまで構築し、高画質ディスプレイを通し、リアルタイムコミュニケーション実現の可能性を飛躍的に向上させることに大いに貢献している。さらに先生は、遠隔医療診断やe-learningなどのフェイストゥフェイスコミュニケーションを現実のものとし、我々のライフスタイルを豊かにするために、ハードとソフトを両輪とした研究開発プロジェクトを推進している。

研究助成

研究課題 知的信号処理手法の画像用雑音除去フィルタへの応用

研究者 ^{むねやす}棟安 ^{みつじ}実治 氏 (関西大学 工学部 電子工学科 助教授)

研究の概要

画像処理の中でも重要なテーマの一つである画像の雑音除去について、雑音除去性能が高く、画像の劣化が少ない新しい雑音除去フィルタの開発を目指している。特に、画像の雑音モデルとしてよく知られたインパルス性雑音、ガウス性雑音およびその混合雑音を対象としている。ここでは、近年注目を集めているファジーやニューラルネットワークといった知的手法を画像用雑音除去フィルタへ応用することを検討している。これらの手法は、知的手法を用いて画像の局所的特徴を認識し、その認識結果に応じた処理を施すことによって、処理性能を向上させることを目指した技術である。これらは処理量が増大するものの、これまでの処理技術と比較して、格段の処理性能の向上が可能となっている。これまでの研究成果である、ニューラルネットワークを用いたハイブリッドフィルタ、対向伝搬ネットワークによる雑音除去フィルタ、学習可能なファジー制御を用いた雑音除去フィルタの検討を通じて、フィルタ性能を向上させるには、フィルタの性能よりもいかに画像の局所的な特徴を的確に捉え分類することが重要であることがわかったため、高精度なクラスタリング手法であるファジーC・Means法やサポートベクターマシンなどを用いて、知的クラスタリングに基づくフィルタの開発に注力することで、より一層の性能向上を目指す。

研究助成

研究課題 波長1.5 μm 帯で発光するSi系発光ダイオードに関する研究

研究者 鵜殿^{うどの} 治彦^{はるひこ} 氏 (茨城大学 工学部 電気電子工学科 助教授)

研究の概要

【目的】

本研究では、 $\beta\text{-FeSi}_2$ を活性領域とするSi/ $\beta\text{-FeSi}_2$ /Siダブルヘテロ接合ダイオードをSi基板上に作製し、低電流注入による波長1.5 μm 帯での室温エレクトロルミネッセンス (EL) の実現を目的とする。特に、歪みによる $\beta\text{-FeSi}_2$ のバンド変調効果を詳細に調べ、歪みによるバンド変調効果を積極的に利用した高効率な発光ダイオードを実現する。

【特色】

半導体鉄シリサイド ($\beta\text{-FeSi}_2$) は、資源量が豊富な鉄とシリコンで構成され、光通信で使われる1.5 μm 帯で発光し、且つ、シリコンLSIで使われるSi (001) 基板上にエピタキシャル成長が可能なことから近年急速に注目を集めている新しい半導体である。 $\beta\text{-FeSi}_2$ を用いた発光ダイオードからの室温ELがすでに報告されているが、その発光効率が低いことなどが問題である。これは、無歪みの $\beta\text{-FeSi}_2$ が準間接遷移型のバンド構造を持ち、歪みによるバンド変調効果で直接遷移に移行していることによる。本研究では、 $\beta\text{-FeSi}_2$ バルク単結晶を用いて歪みによるバンド構造の変化を詳細に測定し、最適な格子歪みの状態を明らかにする。その結果をもとに、Si/ $\beta\text{-FeSi}_2$ /Siダブルヘテロ接合を利用することで最適な歪みを $\beta\text{-FeSi}_2$ 活性層に加え、高い発光効率を持つ発光ダイオードをSi基板上に作製する。大型の $\beta\text{-FeSi}_2$ 単結晶を成長する技術は、他機関には無い技術であることから、これを積極的に利用して研究を進める。

【方法】

歪みによるバンド変調効果については、単結晶 $\beta\text{-FeSi}_2$ に1軸歪み、2軸歪みを加えた光吸収測定、フォトルミネッセンス (PL) 測定を行い、バンド端およびPL発光の変化を詳細に調べる。この結果をもとに、最適な歪みが加わる構造のSi/ $\beta\text{-FeSi}_2$ /Siダブルヘテロ接合ダイオード構造を設計し、MBE装置を用いて素子を試作する。試作した素子の発光特性を多面的に評価し、この結果をフィードバックすることで素子構造および成膜条件を最適化する。

2004年度 科学放送賞

当財団は1984年の設立以降、科学技術の振興と科学技術知識の向上等を目的に毎年優れた科学放送番組に対し科学放送賞の顕彰を行っております。

北海道から沖縄まで毎年多数の優れた作品を応募頂き、高柳記念賞・高柳記念奨励賞・高柳記念企画賞等の賞を贈呈しています。

なお、各賞の選考は、濱田 隆士氏（日本科学協会 理事長）を委員長とする審査委員会を開催し、慎重審査の結果下記のとおり高柳記念賞1件 高柳記念奨励賞2件 高柳記念企画賞1件を決定しました。応募作品は20作品（14放送局）でした。

記

	対象放送局	番組名
科学放送 高柳記念賞	日本放送協会 2004年5月10日 放送	地球ふしぎ大自然 「幻想！夜に草原が輝く ブラジル 光るアリ塚の謎」
科学放送 高柳記念奨励賞	北陸放送株式会社 2004年8月19日 放送	「科学のチカラにどキット！ ～KITサマー・サイエンス・スクール 10周年記念～」
科学放送 高柳記念奨励賞	テレビ愛知株式会社 2004年9月23日 放送	「葉、輝く～アラスカに探る未来 エネルギー～」
科学放送 高柳記念企画賞	株式会社TBSテレビ 2004年9月20日 放送	世界史上空前の謎!! 「古代ローマ 幻の都市ポンペイは なぜ19時間で消えたのか!？」

◇ 選 考 基 準

- (1) 新しい科学技術開発の振興に役立つ放送番組
- (2) 科学技術知識の普及向上に役立つ放送番組
- (3) 新しい放送技術によって制作された放送番組
- (4) その他科学技術の理解に役立つ放送番組

◇ 審 査 委 員 〈敬称略、アイウエオ順〉

委員長	濱 田 隆 士	東京大学名誉教授 (財)日本科学協会 理事長
委員	今 村 悟	日本ビクター株式会社 広報室長
	宇都宮 敏 男	東京大学名誉教授 (財)医療機器センター 会長
	江 川 朗	株式会社総合経営研究所 代表取締役所長
	餌 取 章 男	江戸川大学 教授
	奥 野 花代子	神奈川県立生命の星・博物館 学芸員
	河 合 恭 平	元米国大使館 文化局 勤務
	金 澤 磐 夫	株式会社ダイナミックアート研究所 代表取締役社長
	牛 頭 進	東京ビデオフェスティバル 事務局長
	斎 藤 嘉 博	元武蔵野美術大学 映像学科 教授
	清 野 聡 子	東京大学大学院 総合文化研究科 助手
	高 野 雅 晴	株式会社ビットメディア 代表取締役社長
	高 柳 俊	(財)高柳記念電子科学技術振興財団 理事長
	高 山 久美子	フリーアナウンサー 朗読講師
	中 村 麟 子	映画作家
	西 澤 民 夫	日本S&T株式会社 代表取締役
	原 早 苗	埼玉大学 講師 青森大学 講師
	原 田 信 美	元(財)高柳記念電子科学技術振興財団 理事
	廣 田 昭	有限会社CCT研究所 代表取締役
	松 橋 淳 嗣	日本ビーエス放送株式会社 取締役副社長

◇応募放送局名 (14局)

北海道テレビ放送 青森テレビ 北陸放送 テレビ東京 TBSテレビ 日本放送協会
テレビ朝日 静岡放送 テレビ愛知 東海テレビ放送 名古屋テレビ放送 朝日放送 サガテレビ
沖縄テレビ放送

科学放送 高柳記念賞

放送局 「日本放送協会」

番組名 「地球ふしぎ大自然「幻想！夜に草原が輝く ブラジル 光るアリ塚の謎」

放送日 2004年5月10日 43分

番組概要

世界遺産に登録されている“ブラジル中央の草原地帯、エマス国立公園のアリ塚を中心とした特異な生態系”を最新の研究成果をもとに、世界ではじめてハイビジョン撮影。雨季の初め、草原に無数に点在するアリ塚がクリスマスのイルミネーションの様に光る。その光るアリ塚を、超高感度カメラや高感度駒撮り装置等を駆使して美しく表現すると共に、塚の中の様子を内視鏡レンズや小型カメラを用いて克明に撮影する事で、光の謎やシロアリが生態系の中で果たしている役割を分かり易く、興味深く描く事に成功した作品です。命の環と自然の奥深さに迫り、最も高い評価を受けました。

科学放送 高柳記念奨励賞

放送局 「北陸放送株式会社」

番組名 「科学のチカラにドキット！「KITサマー・サイエンス・スクール 10周年記念～」

放送日 2004年8月19日 49分

番組概要

夏休み恒例となった金沢工業大学主催の科学実験教室取材した番組です。550名が参加した20の科学講座の中のいくつかで、子供たちが実験やものづくりに真剣に取り組み、夢中になってゆく過程の生き生きとした表情を捕らえています。子供ならではの思いがけない発想や失敗の悔しさ等を映しながら、科学の不思議やものづくりの楽しさを体験してゆく様子を描いて、親子で楽しめる番組になっています。視聴者や子供達が科学に親しむきっかけともなる好感の持てる番組として、奨励賞に相応しいと評価されました。

科学放送 高柳記念奨励賞

放送局 「テレビ愛知株式会社」

番組名 「「葉、輝く～アラスカに探る未来エネルギー～」」

放送日 2004年9月23日 55分

番組概要

未来エネルギーの可能性をもつ植物の葉緑素“クロロフィル”の光合成に関わる研究現場に密着した番組です。北極圏アラスカの厳しい環境に育つ植物の秘密を現地で解明し、更に将来の研究のため極地の植物を特殊な生命維持装置に入れ、太平洋を越えて日本に輸送するという計画を取材しています。未来エネルギーの開発に挑む研究者達の姿と、極地の植物の持つ生命力が驚きと感動を与える優れた番組です。

科学放送 高柳記念企画賞

放送局 「株式会社TBSテレビ」

番組名 「「古代ローマ 幻の都市ポンペイはなぜ19時間で消えたか!？」」

放送日 2004年9月20日 114分

番組概要

西暦79年、古代ローマ都市ポンペイ消滅の謎を探る大型番組で、最新の火山学、考古学の両面からポンペイの悲劇を解明しています。発掘によって明らかにされた火災サージのエネルギーとその衝撃のすさまじい迫力を伝え、火山災害のメカニズムを分かり易く解き明かしています。又、CGを駆使して当時のポンペイの町と人々の生活の様子を生き生きと再現するとともに、BBC制作の再現ドラマによって、2000年前の人々の災害時の行動を伝えています。新しい形の科学番組として、企画賞に選ばれました。

(財)高柳記念電子科学技術振興財団

〒102-0028 東京都千代田区一番町4-5

ニューライフ一番町309

TEL 03-3239-1207

FAX 03-3262-3028

E-mail : tkinenz@oak.ocn.ne.jp

<http://www.koueki.jp/disclosure/ta/takayanagi/>